

大隅加治木同鄉會

大 隅 加 治 木 同 鄉 會

明治四十二年十月十五日發行

第
十
號

大隅加治木同鄉會

社城第十號

論

說

在倫敦濱田生

中等國民の覺醒

昨年來世界の耳目を聳動したる事件の、最も重大なるものを擧ぐれば、先づ指をバルカン問題及び、トルコ並びにペルシャの政變に屈せざる可からず、唯だ是等の問題は事いづれも政治に關するを以て、其詳論を試みるは、我『社城』誌の性質と抵觸するの恐れあり、殊にバルカン問題の如き、全く外交舞臺上に終始したるものには、今措いて之を問はざるも、トルコ及びペルシャの政變は、最近數年來に於ける、中等國民覺醒の先驅を爲すものと見る可く、世界文明の發達ます／＼著しきを示すものなりとして、聊か其後の動靜を叙せんに、昨年七月トルコが憲法を復活して、いよいよ今日の新制度を確立するに至るまでの間、内閣の更迭を行ひたること以後實に五回、事を干戈に訴へたる結果として生じたる、死傷者の數は無慮數百名に達し、一時は國を擧げて全う、騒擾の渦中に投じたる有様なりしも、當然改革者の勝利に歸して、遂に多年來の秕政を改革し、以て實際に文明流の一國たらんとするに至れり、去れど憲法を實施したるの一事にては、固より未だ満足す可きに非らずして、當局者は銳意諸般の改革に從事せる中にも、財政及び經濟事情に就ては、從來の弊害最も著しきものありしを以て、根本より舊体を改め、新式の財政を調理す可き。新大臣には、佛國に於て最高の教育と訓練とを受けたる、新進の人材を抜いて之に任す、又英國の指導監督の下に、新たに文明流の中央銀行を設立して、其總裁には此程、學識經驗ある英人をして之に當らしめ、以て國庫金の取扱ひと一國金融市場の中樞たる可き、中央銀行本來の職務を、遺憾なく遂行せしめんことに努むるなど、着々改革の實を擧ぐるに至れり、又ペルシャに於ては去る七月中旬、新皇帝の即位と共に、兎に角に政變の一部落を告げて、漸く憲政の基礎を

(二) 定めたるが如くなれば、同國も亦遠からずして圓満に、立憲國たるの實を擧ぐることならん、今より期待すべき處にして、右兩國の爲め何人も慶賀せざるものなかる可し。

元來兩國と我國とは、外交または通商貿易等に於ては勿論、其他に關しても未だ何等、關係の見る可きものなしと雖も、ペルシャと云ひトルコと云ひ、共に東洋もしくは近東に、國を立つるものにして、我國との地理上の關係に必ずしも淺じさせず、而して東洋もしくは近東諸國中にて、實際に一等文明國たるの實あるもの、我日本の外には未だ之を求む可からざる有様なるに、今や兩國の覺醒かくの如くなるを見るに於ては、自ら一種の愉快を感じざるを得ず、又特に一言の止む能はざるものありと云へば、數年來中等國民の覺醒、俄かに著しきを致したるに就ては、是等の國民か、日露戰爭に於ける、日本の大勝に依りて、常に鼓舞せられたるの一事、最も有力なる動機なりとの說、夙に識者の間に記められたることは是れなり、此說は既に世に隠れなき所のものにして、今更云々するい價値なきが如くなれども、果して正當の説なりとせば、今眼前に所謂、中等國民覺醒の事實、見るに及びては、吾々本國民たるもの豈に一種の感なきを得んや、唯だ兩國は歐洲諸強國に於ける、外交問題の中心たるの觀あるだけに、一方に或二國より指導を受くるの利益ある、其他方に於ては他たるを、免れざるやも知れど雖、苟くも世界文明の進歩に關し、其大局を觀るの心掛けを有する人々に取りては、今や中等國民覺醒の成行如何は、常に注意を怠る可からざるを信じて疑はず、思ふに兩國今後の發展に關する聖知は、尙ほ追々我各新聞紙上に顯ることとなん、今は叙事の空漠に失するの恐れあるを顧みず、唯だ敢て一言したる所なり（八月下旬）

嘱商議員諸公

在北米 湯田碧水

同鄉會商議員諸公松城の風光今果して如何碧水山水秀麗の故郷を辭し遠く北米自由の郷に身を投せしより以來茲に五年爾來諸公の動靜を詳にせず諸公健在なりや否や碧水遙に一書を裁して諸公の座右に呈し以て諸公の一

考を煩はす所以のものは豈徒らに文を弄する爲ならんや蓋し愛郷一片の情默せんとして黙する能はざる所のものあればなり

有史以來未曾有の大戦に從事し曠古の大捷を博し一躍忽ち列強の伍伴に入りし大日本帝國は今や朝野を擧げて戦後の經營に汲々たるの時外は國權の伸張に内は民力の充實に我五千萬同胞の双肩に擔ふ責任豈に輕しとすべけんや、然り而して戦後の經營を全うし國運の進展を企圖する所以の途は須らく國家の基礎たる町村の繁榮發達を計るにあり町村の繁榮は畢竟個人富力の昂進を意味す之を反言せば個人富力の發展は之則ち町村の繁榮に資する所以にして町村の繁榮は畢竟國家の富強に資する所以なり加治木同鄉會は則ち此の意義に依りて成立し此の意義によりて進むものにあらずや嗚呼同鄉會の責任重大なりと謂ふべし

同鄉會商議員諸公、諸公は同鄉會の花たり實たり否我加治木村の花たり實たり若し夫れ我加治木村より七十の諸公を拉し去らんか我が加治木村は花なき實なき蕭條たる空林枯木の感なくんばあらず諸公は我一萬五千の村民より精選せられたる商議員として我同鄉會の主腦たり幹部たり然り而して諸公は我加治木村の榮枯盛衰と双肩に擔へ我村第一流の紳士たり紳商たり諸公が商議員の重任を負はれしより既に二年碧水不幸にして未だ諸公が我村の繁榮に対する高論を拜聴するの榮に接せず碧水の寡聞なる未だ諸公が我村の繁榮に就き親しく調査研究せられしを耳にせず我同鄉會は村民の親睦我村の繁榮を標榜して國家の富強に資せん爲め大日本帝國九州の一角に起りしものにあらずや而して諸公は會長を補佐し下は會員を指導するの責任あると共に重要事件に對しては意見を提出せらるゝの責任と資格とを有するものにあらずや諸公は我村の繁榮に就き未だ何等の考案を

有せざるか抑も未だ時機到来せざるに由る乎思ふに肥薩鐵道の全通は目曉の間にあり鐵道開通後の我村の既往に鑑み更に全通後の將來を想へば村にたるもの豈に袖手傍観すべきの時ならんや須らく奮起し大に劃策すべき好時機たるを信ず徒らに春夢を貪り覺醒の機を失せば後日悔ふども及ぶなけん語に曰く天の未だ陰雨せざるに方つて脇戸に綱繆の策を施せと味ある哉言や於此乎碧水今諸公に建議す曰く速に商議員會を開き以て諸公の中より加治木繁榮調査委員を擧げ農工商の各方面に亘り精密なる調査研究を遂げ其結果を總會に報告し以て我村の繁榮策大方針を確立し村民の嚮ふ所を不せ之れ我村の繁榮に一步を進むるの階梯也諸公は如何どなす、

同鄉會商議員諸公、諸公は果して余輩の囁望を容るゝの雅量と勇氣ありや否や遙に微意を披陳して諸公の一考を望む盲言多罪々々



古き木は焼くに良く、
古き葡萄酒は飲むに良く、
古き友人は信するに良く、
而して古き書は讀むに良し。

通 信

東京柁城同交會便り

島津久賢男送別會

七月十七日、柁城同交會は今回島津男爵が歐米漫遊の途に就かるとの學を壯にせん爲め牛込江戸川筋清風亭に於て午後六時より送別會を開く。谷山會長不在に付き白尾清氏起らて開會の辭と同時に男爵閣下に對し左の意味の祝辭を述べらる。

今や盛夏炎天焼くが如く世人の多くは山紫水明の地に避暑するに關せず單り我が壯心息まさる男爵閣下には歐米漫遊企圖せらるゝの風聞を耳にするや吾等同郷の士は感激に不堪鶴首其日を待ちつゝありしに果して噂の如く男爵はト京せられ近々横濱出帆渡英の途に就かるゝに當り聊か其行を壯にし祝意を表せむが爲會員相計りて送別會を開會しれる次第なり。

顧ふに島津家は古來獨特の歴史を有せらるゝは今更言を俟たない、而して我舊領主島津男爵が今度渡歐するは島津家としては始めての如く思はる、斯かる男爵を吾人の頭に戴くは我郷人士の喜び且つ誇りとする處

にして夙に男爵は温雅高徳、公共の爲め特に我郷の爲めに尽力さるゝ處幾何なるを知らず、彼の雑誌柁城の如きも専ら男爵の力により生れたるものにして一同は其勞に對し深く感謝に堪へざる處なり。

抑ひ英國は世界文明の中心にして文物制度皆彼の地よりして傳はる處なり今や男爵は此の地に其遊學の大半を過ごされ親しく社會の實狀を觀或は知名の士に接せられなば其裨益せらるゝ處多からん。

一朝視察を終え御歸國の上は我社會の上に刮目して見るべきものあるを信して疑はず、願はくは閣下よ、自重自愛し他日再び是に會し歡迎の辭を呈したき日を待つや切なり(拍手)。

男爵拍手の中に起ちて予が今度歐州へ島渡遊ぶに付きわざく盛大なる送別會を催せられしば深く感謝する處にして白尾氏が曰はれし多大の希望を齎らし得るや否や疑問なり然し予も渡歐の上は出來得る丈多くの觀察を遂けて歸國の上は郷の爲め進んては國家の爲め尽す考へなり、諸君も亦大に自愛せられよ、白尾氏は予を島津家として始めての渡歐者と曰はれしも先きに都城の男爵が渡歐されたるを以て予は貳番目に當る。次に柁城雑誌も予一個の力にあらずして郷里有志諸氏

の協力によりて生れたるものなりとて謙遜的謝辭あり、
(拍手)。

是れより酒宴に移り談笑互に盃を交へ小濱氏先頭に
男爵閣下の健康を祝せん爲め一同乾杯を行ひ、其の健

康と祝福を祈りたり暫くして男爵歸途に就かれたれ共
衆尚ほ散せず、白尾、石原氏等得意の美音をあげて歌

い且つ吟し満座興に乗つて喝采交々起る、唯惜むらく

は男爵の歸後なりしを、斯くて閉會せしは夜十二時萬

鐘響を止め電燈の光櫻樹の間に薄暗く江戸川畔涼風千

石の時なりき。出席會員は

日野辰二、小濱松次郎、安樂直治、山下彌七郎、城川
善藏、林平太、白尾清、上村武治、原田維織、全孫助
、池田彪一、石原市二、有川貞治、松出徳志、立山甚
藏、白濱四郎助、中平田幸太郎、吉井常二、豊留駿太
郎、元村半助(二十名)

序に山下彌七郎氏は同郷人あらざるも男爵と懇意にして且松城に關係ある故參會せらる。尙ほ同日千葉縣
辯護士神田伸二氏は松田氏を以て男爵に祝意を傳へられ同時に大會へ金圓を寄附せられたり。

男爵の新橋發

廿一日午後二時横濱出帆の讃岐丸より渡歐の途に就か

可を得て目下鐵道工事に着手し同工事は本年十二月中
に本線に連絡竣工の豫定にて工事を急ぎ居れり、竣工

の曉には會社の建築材料を運搬し夫れど同時に建築に
取掛り來年十一月より製糖に着手の計畫なりと云ふ、
又彰化附近にも七百五十噸の大製糖會社設立の計畫にて既に出願中、出願者は大倉組と他に一名合資なりと
のことなり、二大製糖會社設立の曉には產出高も莫大
のものならんか

又廳下二林地方は海濱に位して荒蕪原野なるも將來見
込なきものとして開墾に手を出すものなく、丸で放棄
したる所にして官吏側にても二林に轉勤を命ぜらるゝ
ものは懲戒的の様に見做され居たる処なりしが何時迄
も社會は遠島地として看過するを許さず、社會の發展に
伴ひ早く此に着目したるは愛久澤直哉氏にして氏は此
所に源成農場たるものを設立し内地より農民の移住を
なせり、移民の状態は本年一月より六月末に至るの間
、今之を原籍地別にして舉くれば左の如し

原籍地別	戸 数	男	女	計
福岡	二	八	九	一七
岐阜	六六	一一四	九四	二〇八
熊本	一五	三三	三四	六七

る可き男爵には同日午前八時新橋を發せらるゝ折りは、
我鄉人士は勿論朝野の名士に送られ萬歳聲裡に轟車し
日野氏は男爵と同道神戸迄見送らんとて其に發せられ
たり。

臺灣便り 岩崎剛

當彰化廳の產物としては是迄米蕃薯落花生果物等なり
しが二三年前より各所に改良製糖場の設立を見るに至
れり、糖業の發展に伴ひ改良種は年一年に擴張せられ
今や在來種は生嗜用を除くの外全く其跡を絶たんとす
るの盛況に達し本期に於ける植付面積は約三千甲に上
れり、之を前年の面積に比すれば實に一千甲の増加な
り而して本期に於ける廳下各製糖場の製糖高は改良糖
廓七ヶ所にして此製造力五百四十噸にして四百四十一
万六千五十四斤、在來糖廓七ヶ所にして五十万四千七
百三斤合計四百九十二万七百五十七斤を產出したるが
來期は本期に比すれば一千甲の増加なれば優に一千万
斤は產出する割合なり、製糖熟の昂騰したる今日臺灣
唯一の富豪家なる臺北廳下枋橋の林本源なるもの貳百
萬圓の資金を投し地を廳下東螺西堡溪州庄にトし能力
七百五十噸の會社を設立することとなり既に督府の許

新嘉
計
一二一
二二七
二〇九
四三六

三八
七二
七一
一四四

移住地に對しては今農場の内地より移住地に至る迄の
旅費を貸與し住家は家族の員數により一定せざるも與
耕牛農具及び牛計に要する物質をも當分の間貸與する
ことなし耕地は一戸に付一甲步畠一甲步の割合を以
て配當し耕作地は全部整理を行ふ見込にて已に道路を
通じ塊洲を掘り整理完了せるもの六百甲步に及び移住
民は風向地勢並びに農場に於ける耕地の都合により十
戸乃至三十戸の集落的部落をなせり遠島地として嫌は
れ居たる二林地方も彰化に亞ぐ内地人の多數を占むる
に至りたるを以て該地方を旅行せしめ内地人の移住を
計りたる爲め今や夫婦相携へて農耕に從事する者多く
教育を授くる事となり恰かも内地に於けると毫も異な
る事なし、移民は氣候風土に馴れ健全に熱心農事に從
事しつゝあれば完成遠きにあらざるべく、移民の成功
期して待つべきなり

次に二林にて下鹿港街の辜顯榮なるものの經營にかか
る開墾地あり全氏は元と勞働者にして僅かに糊口を凌

(八) き居たるものなるが、去る二十七八年臺灣の我が領土となるや、清國の殘兵皇軍に敵したる時に於て、彼は早くも皇軍に從ひて道案内をなし夫がため用ひられて勳六等を授けられ、僅か十二三年にして數百萬圓の資金を作り今日にては臺灣唯一の紳士として三尺の童子も彼が名を知らざるものなく、三十七八年の戦役の功に依り勳五等に叙せられたり。士人間はれども幸

大人とまで尊稱し居れり、同氏が經營の開墾地の移住民は苗栗廳桃園廳新竹廳其の他より八十名の廣東人種たる本島農民と先さに岐阜縣より七戸人口三十人を移住せしめ盛に開墾しつゝあり然るに全地移住民は渡蔓後僅かの間に九名迄死亡し一時は頗る成績不良なりしも漸次風土に馴れたると共に、衛生に注意を怠らざるため健康状態極めて良好となり今や一日平均九甲歩の開拓を了り主として甘蔗を植ゑ、側ら蕃薯と落花生陸稻の類を栽培し居れり、兩所共内地より移住の計畫を爲し居る由なれば二林地方は急速力を以て發展するならん

城 東京便り 岩城 豊次
編輯全人各位益々御清健の段奉慶賀候、さて小生は當るならん

大生ハケ年ぶりの上京に御座候へば各方面の變化隨分甚しく就中交通機關の發達と市町の膨張發展は實に驚く可く候、小生寓居の太久保の如きは只躊躇時季のみ賑かにして寂莫たる部落に過ぎざりしが今は日を追ふて繁昌に赴きつゝあり他も皆斯の如し、悠長なる田舎者は仰天目を廻はし彌次郎兵衛を演せしこと少からず候。

全鄉諸君に少からず面會仕り候、孰れも新銳活動の氣溌溢するを見る諸君と雑誌に關し意見を交換し少らず注文致し置き申候、枝元君とは朝夕面會君により東京社會の表裏の情況を詳にするを得其現金の世中なるに今更驚きし者不尠候、上村君より東宮御所等に於ける状況を承はり畏れ多くも雲上の御事を伺ひ知る所少からず誠に幸慶に存申候。

偶 感 在東京 枝 風 生 雜 築

一日池田君の寓所に於て原田孫助、榎木郁之助君と相會し快談致し主人公の厚意に因り杯觴と共に醉愈加はりて興奮至り高談雄辯堂を壓し申候、在横濱の水間氏の招きに應し今地に出掛申候氏は五年前より全市に外人對彫刻家具類の商店を開業、該商品は皆氏が新に意匠を凝らして製作せしめる者にて大に外人の嗜好に投せりど、只外人相手の事なれば隨分大仕掛けなるだけ資金の乏しきに困まるとの事兎も角有望にして興味深き業と見受けられ申候

横濱に入り込むと遙か右手の岡上に高く頭角を見はせる巨像を望む之れ井伊掃部の銅像にて其像の偉大なる

と臺石の立派なることは蓋我國流行の銅像の王ならん乎と存せられ申候廣闊なる境内は堅固なる柵を廻らし門固く閉して妄りに入るを許さず、門番に刺を通じて入るを得たり抑も該銅像は大に物議を醸したるもの故に何か憚る所ありて警戒爾々乎と思はれ申候、他に申上度事夥多御座候へ共御土産話の空乏を恐れ之れにて御免を蒙り度候(九月十一日)

夏思ひ掛けなく都の人と爲ることと相成候處出發の際は缺禮致せしのみならず今日迄御無沙汰仕り候、何卒不惡御宥恕破下度候

最早蛇城第十號の編輯期と相成候へば各位御多忙の御事と存上候、小生は兩三日の後出發伊勢詣りや其他の見物共致し歸郷の筈に候へば到底編輯の間には逢はざるべく候間可然御依頼申上候

小生ハケ年ぶりの上京に御座候へば各方面の變化隨分甚しく就中交通機關の發達と市町の膨張發展は實に驚く可く候、小生寓居の太久保の如きは只躊躇時季のみ賑かにして寂莫たる部落に過ぎざりしが今は日を追ふて繁昌に赴きつゝあり他も皆斯の如し、悠長なる田舎者は仰天目を廻はし彌次郎兵衛を演せしこと少からず候。

全鄉諸君に少からず面會仕り候、孰れも新銳活動の氣溌溢するを見る諸君と雑誌に關し意見を交換し少らず注文致し置き申候、枝元君とは朝夕面會君により東京社會の表裏の情況を詳にするを得其現金の世中なるに今更驚きし者不尠候、上村君より東宮御所等に於ける状況を承はり畏れ多くも雲上の御事を伺ひ知る所少からず誠に幸慶に存申候。

◎從來西洋に於て、最も温順貞淑の評ありし英國婦人も、近頃米國婦人が金力を鼻に掛けて、續々と押し掛け嫁に來り、上流の庭に入り込んで、盛んに轉婆風を吹かすので、可惜英國婦人固有の美風も、之れが爲めに蹂躪せらるゝ傾きありて、秘かに憤慨する者ある由を彼國人より聞き及び候が、こは決して他人事では無之と存候。

◎之れと同様の嘆聲は日本婦人の上にも放たれ申すべく、現に日本にも、盛んにアメリカニズムが跋扈して歯の浮くやうなハイカラ女が、此處にも彼處にも首を廻はし居るには候はずや、本尊の米國に於てさへ、男

性的女子の跋扈には、困り切つて居るといふのに、日本はこれから盛んに开を真似やうとの意氣込み、本氣の沙汰とも思はれず候。

◎西洋で漸く、トラストの弊を悟りかけた頃に、日本ではボツク之れが流行を見、西洋で個人主義の弊に悩やみ初める時分、日本では却て之を歎く者す。すると日本の田舎（加治木をも含む）は、首府よりも五年若くは十年後くれ居ると言つて可也。

◎最も手近かな實例を舉ぐれば、東京に於て少しく心ある父兄は、其子女を、女子大學邊に入らしむる者なきも、地方に於ては、まだ大學といふ立派な名稱に惚れて、入學志望者頗る多く、目下殆ど地方出の遊學が出來た爲めに、最も眞面目な、實質ある、而かも遙かに程度の高い女子高等師範あることを、忘れた地方が多いといふ話も、ほのかに承り候。

◎山家村裡に在ては、實質の如何に拘はらず、派手な虛名を採つても、別に不都合もなかるべけれど、競爭の烈しき都合に在ては、これでは役に立たず候、故に自然實質を尊ぶやうに相成候、恰も地方に於ては、今

尙ほ肩書や位階が尊ばれ、デモ學士の如きも相應に幅を利かし居るが、都會に於ては實力が唯一の資格で、實力なき者は、頓と頭が上がらぬやうなものに候、都下の場末の某郵便局に實力なき法學士が二名、孰れもスタンプ捺しに雇はれ、僅に口を糊しつゝあるのを見

て小生は益々前の感を強う致候。

◎兎に角女子大學の隆盛は、學校設立者の爲には神父べき事に候、校長成瀬氏の熱心と根氣とは、能く今日の盛大を來たし；ものとして、其成功を祝するには客

ならず候へども、唯此校の卒業生が、各地方に歸つて、其浮華輕跳な惡風を、質樸醇厚の女子間に傳接せしむるの害に想ひ到れば、悚然として恐れざるを得ず候。

◎何といつても、アメリカニズムの跋扈は、日本婦人の爲め好ましからぬ事に候、願くは我加治木の婦人會にも、此潮流の押寄せざるよう、縱令押寄せて来ても能く自己の立場を守つて、足を凌はれぬやう、豫め教育者の注意すべき事と存候、無論アメリカニズムと申しても、其全部を非認するには無之、米國人すら因まつて持餘まして居る所謂アメリカニズムを非難

するものに候

◎島津男爵にも如上の事に就ては親しく御觀察に相成る事と存ト候、小生も特に御依頼申上置候へば、孰れ精細なる御通信に接し得べく、樂しみ居候。

◎午後三時、鐘の音般々として低く長く、船中に響き渡り候、これ出帆時間迫まり、見送りの男女に本船を去れとの合圖に候、握手は一齋に繰り返へされ候、小生共一行は、シャンパンの杯を擧げて、男爵の健康を祝し航程の無事を祈り竭きぬ別を惜んで船を退き申候、棧橋に降りて、仰げば山の如き巨船は、徐々と搖き始め、爽颯たる男爵の英姿も髪髪として唯だ黒く、打振るハンケチの片々と白く閃めくのが見えるばかり、これすらも見分かぬやうになつて、小生はこらへ切れず獨り涙を拭ひ申候、船出を送るほど、感慨多きものは御座なく候草々

翁の道德觀に曰く

道は天地自然の道なり。講學の道は敬天愛人を目的とする事と存ト候、小生も特に御依頼申上置候へば、孰れ精細なる御通信に接し得べく、樂しみ居候。

又曰く

道を行ふものは固より困危に逢ふを免れざるものなれば如何なる困難の地に立つて雖も事の成否身の死生存に少しも頓着せざるを要す。事には上手下手あり物には出来る人と出来ざる人とあり。然れども道を踏むに至れるものは皆自ら招くところなり。故に己に克ちみ事を敬するが故に功立ち名顯る所以なり。而も功立ち名顯るに及んでや。いつしか自ら愛する心起り恐懼戒慎の意弛み驕矜の氣漸く長しろの成し得たる事業を負ひ苟も我事を成さんとして拙策に陥り終に敗るに至れるものは皆自ら招くところなり。故に己に克ちて睹ず聞かざる所に戒慎するを、要す。と

南洲翁は千古の偉人なり偉人中の偉人なり。其言行は吾人の心の守となし行の則るべきもの甚多し、今其言行中予の特に感動したるもの、二三を左に抄錄せん。

偉人の言行鈔錄 不動生

(二十) に遭遇したるか故に今は如何なる難事に出會するも敢て動搖せざるなりと。

又曰く

道を行ふものは天下舉けて毀るも足れりとせざるは自ら信するの厚きが故なり。其工夫は韓文公が伯夷の頌を熟讀して會得せよ。ど。

又曰く

道に志すものは業の偉なるをのみ貴ばざるなり。司馬温公は閨中に語りし言も人に對して言ふべからざる事なしと云ひたりき。獨を慎むの學推して知るべし。人の意表に出で一時の快適を好むは未熟の事なり戒むべしと。

翁又曰く

事大小となく正直を踏み至誠を推し一事の詐謀を用ゆべからず。人多くは事を指支ゆる時に臨みてや詐略を用ゆて一旦其指支を通せば時宜次第工夫の出来る様に思惟すれども策客の煩ひ必ず生し畢竟に敗るゝに到るべし。正道を以て之を行へば目前には迂遠に似たるものあれども先に到れば成功は却て早きものなり。ど。

翁又曰く

は苟も大丈夫の襟懷なりと云ふべからず』座にありし參謀前原一誠これを見これを聞いて歎して曰く「予西郷の人と爲りに服する事久し而も此一事に至りては唯其益々偉大なるに驚くのみ」と。

福州雜錄（繼承）

菊廻舍

城

于山に一大碑石あり平遠臺と銘す鎮海樓と共に倭寇鎮定の記念として建てられしものなりと云ふ蓋し我朝北條時代より徳川の初めに至る頃常に冒險有爲の士海に航して南洋地方に往航し種々の利權を主張して其極争鬪を開き海賊的行爲をなせしこと一再に止まらず清國人倭寇と稱して甚だ之を恐る後倭寇の停みて記念碑の建てられしものの誠に所以あるなり

南門を出て閩江の左右に繁華なる市街あり之を南臺と稱す此閩江に架せられたる橋は所謂萬壽橋にして最有名のものなり宋朝政和年間の建設に係り長さ二百五十間幅三間余皆花崗石を以て構造せらる其構造法の巧みならず外觀の美ならざるとは今日大に議すべきものありと雖然かも巨万の資を投し幾歳の年月を費して竣工せしことは疑ふべくもあらず若しろ橋上歩を停めて四景を眺めんか杜鵑の鳴くを聽かずと雖涼風の袖を

イを籠絡して陰に事を謀るものはよし其事を成し得るとも慧眼を以て之を見れば醜状寔に著し人に推すに公平至誠を以てせよ、公平ならざれば英雄の心は決して之を攬らざるなり。ど。

翁の高且大なる行爲

明治二年八月武人の行賞に際し翁は維新の首功として復許されず己むを得ずして之を受けたり。ど。成辰の役北陸の俊傑河井繼之助陣歿して北陸略ば平定するや。翁は先づ一兵に勦らずして米澤藩を降し轉して山形に入り米澤藩をして庄内藩の降伏に努めしめたるも庄内藩聽かず激戦の後漸く降伏の議を決し使者を翁の陣營に送れり。翁これを引見して使者を待つこと懲懃を極め最も寛大の條件を以て降伏を容れ直に兵を徹せしめたり。廳て庄内の使者歸りて後官軍の諸將士翁が庄内藩の使者を遇する事厚に過ぎて主客を轉倒せる傾あり且降伏條件の輕きに失せるを問 や。翁は襟を正うして曰く『敵となり味方となるこれ命のみ彼等が刀折れ彈盡きて復爲す能はず來りて降を請ふ衷情察すべからずやこれを待つに敗者を以て輕んするが如き

拂ふなしと雖詩趣勃然として起り低回するに忍びざるの感を生す試みに眼眸を放つて東下流を眺めんか逶迤連綿たる河流は遠く流れて遙かに馬尾の邊に至り煙霞濛々白帆を包むの景眞に言ふべからざるものあり况んや居留地の光景近く一畔の中に集りて白堊高樓樹間に散見するに於てをや仰て鼓山を眺むれば絶頂高く雲表に聳へて餘脈遠く北方に連り或は高く或は低く綿々連亘して盡くるところを知らす其山水の對照絶景なるに於てをや近く橋の下には支那型船舶幾百艘となく碇泊して紅旗を翻し時に或は小輪船の烟を吐いて其間を縋ひ行くを見る眞に之れ好個の一大畫幅萬壽橋は遂に福州の花たるを免れざるなり

萬壽橋に次いで有名なるは洪山橋なり洪山橋は萬壽橋の上流凡ろ五涅の所に架せられたる石橋にして長さ二百間幅一間半又皆花崗石を以て建設せらる此を渡りて行くこと五六町にして有名の金山塔あり塔は五重塔を有する一小廟に過ぎずと雖閩江の中流に建設せられたるを以て恰も龍宮を望むが如く其奇觀云ふべからず特に此邊河廣く山高く山水の對照絶景にして其雅趣筆紙の能く盡すべきにあらず若し其れ夕陽五重塔を照して烟霞に帆を罩め歎乃の歌幽かに聞ゆるの時此邊を逍遙

せんか遠く俗界を距れて仙境に遊ぶの感あり或人金山
塔を咏める歌あり曰く

あな嬉れし龍の宮居に詣づべく我を乗せたる

船は出にけり

漕きいで舟は霞にかくれたり金山塔に

夕日残して

此處を溯ること凡う十町にして閩江三角洲の基点に至
る是れより流れ愈々急にして舟楫の利倍々困難となる
然れども福州の閩江に負ふところ渺少にあらず閩江を
除けば即ち福州なきなり余は此に關於てか江を語らざ
るべからず

文苑

島日記・みるも生

島日記は去る四十年の九月母を伴ふて種子島に遊んだ折の日誌の一節を抄録したものである。人に示す程のものではないのだが、

籠底に藏つて置くよりは、保存の上から云つても、記念といふ方

から云つても都合が宜いので餘白をいることにした。

九月十五日 朝床の中にて簫笛の音をきく。『蒸氣船ですよ』と教

へられ蹶起歎楊子を啣へ本源寺坂を寺の門まで行く、

に訊いたらこうめ川よどいふ、どう書くんだと今度は松ちゃんに訊いたがよくわからない。

橋より西の方は一面真砂の汀、白波寄せては返しつしてゐる。少しひき上つて蟠蜒たる老松がふり面白く立ち并んでゐる。此處に海底電線のうち上る處がある。見わたす向ふ汀傳ひ海に突き出たこんもりした森があつて木の間に鳥居が見へる。何の神社だと訊くと安徳天皇が祭つてある處といふ。この一帯の風光得もいはれぬ眺望なるに行ひて見やうかと思ひしも又にしやうと思ひかへして退却す。

午后は喧ましい蟬の聲の中で書を讀む。

京は春の雨の琴の京である。中でも琴は京によく似合ふ。琴の好きな自分は矢張り静かな京にすむが分である。……(虞美人草山)
十六日

夜の靄全く霧れやらず、和みわたれる暁の海を黒き烟を吐いて汽船が寄せて來る、と此方の汽船問屋邊と思はれ、家根の蔭から端舟が一つ、二つ、三つ沖へ向いて漕いでゆく。

食後町に下る。今度は町端れまで行くつもりで南の方へ足を向けた。此町の商人は大抵鹿兒島から移住して來てゐるといふ、海岸一通りに過ぎないけれども何の店でもすべて業体が整頓して不自由は感トまいと思はれる、とある店に立ち寄りて繪葉書をもどむ。軒先の上には眼の大きな若い女の半身を描いた拙い繪看板が掲げてあつた。白粉や石鹼や洗粉やリボンや香水や女の髪飾り裝飾道具のいろいろな小間物を人目に立つやう置き並べてあるけれども、奥への路地を少しわけて、間壁の方には米か麥かであらう、荒蕪包みやら菓包みがごちやくに置いてある。恰度新しい時代の空氣に触れて頗るかぶれて居ながら、しかも全く舊思想を脱し得ぬ入を具体的に示したらかうかとも思はれる姿だ。

そこで離れて少し行くと町はおしまい、幅三十間許の川のうち出しになつてゐる。折柄満潮のちやぶくと浪が岸木を洗つてゐた。何といふ川だとどめちゃん

ふ、神氣爽然。

九時過ぎ森の峯に西田家を訪ふ、家は鬱蒼たる森の中にある。庭前の綠樹の間より城の濱一帯のさながら南洋の景色に似るを望む、祖父君八十九になり給ふがいろいろと昔語りなぞし給ふ。十一時南島偉功傳をかり辭し返る。

郵便が來て居た。綠葉よりの葉書も雜つて居る。故郷から回送して來たのである。

八月十四日、故郷を去らんとする日悲報を兄が耳に致す。月の十四日夜築山正夫兄箱根にて長逝す、病症は脚氣衝心、其日午前鎌倉の圓覺寺へ去り夕暮箱根湯本に着して其夜苦悶遂に逝ける也と悲矣哉。遺稿はトルストイのクリューテルソナタを譯して『長恨』と題するもの一巻青春有爲の才を抱いて逝く誰か長恨の譜に泣かざるものあらんや。と

築山死す、星邱逝く! 噫これ眞乎誠乎?、文意は正に彼れの死を確に傳へて居る。あゝ渠れ眞に逝けるかく、果然として又他を思ふひまもなかつた。此一日星邱を思ふ、相見相語らひける日の彼れ、東西袂を分ちて書讀相勵まし、相教へける日の渠れ、

俊爽の風姿、眞摯なる態度、卓越せる見識、之を包む温雅なる言行、而して天涯の客舍孤獨にして逝ける當時の渠れ。涙はつきざる泉の如く流れた。

夜家を出で町を過ぎり八幡社の石階を拾ふ、石階は五十段もあらう、直立したやうなのを登り了ればさくやかなる八幡様の御堂が晝尚ほ暗く鬱茂せる山を負ふて立つてゐる、ふの様に腰を卸した。

十六夜の月は隈なく汎へて、渚傳ひに立ち並べる市街から城の濱の白砂の汀、箱崎の岬、此間に擁せられたる赤尾一灣の水は清冽冰るが如き月光を浴びて白く光つて居た。西の方廻かに馬毛島が夢の如く淡く浮んで居るやうのも見へる。

風のない静かな寂びしい夜である。

後の小暗き山の中にはいろ／＼な虫や蚯蚓が頻に鳴いて居るサラ／＼と落葉が鳴る。稀には名も知らぬ鳥が鳴く。ろの聲をきく海を眺め島を望んでわが漂浪の生を思ふた。世にすぐれたる才思を抱きながら漂浪にして斃れた薄命なる友を思ふた。沈痛なる哀愁が潮の如く胸へこみあげた。

思想家として、革命家として渠れの天分は餘りに高かつた。年若うして其世に給し社會に禍し、人に盡しかつた。

眉を壓するを望みつゝ壹時頃島間に着く。こゝより茎永まで五里、原野、平林、阪路、溪谷どうかすると島に居るといふ心持ちから離れることがある。廣闊なる

平野、山林、未拓の地がまだ余程ある。上中を經て茎永に着せしは黄昏時であつた。數千項の稻田環らすに奇石怪岩の山、優容済態の峯を以てし山麓人家列なりて晩烟あがる、景勝絶佳なるが月見橋に立ち、明月の皎々として東嶺にさし出るを望めば宛として唐畫を見る山水美だといふ。川添の堤を行き田圃の畦道を行ひて峯を出でず、人顔を辨へかねる程の頭であつた。汗に塗れたる旅装を解き巖窟の中に湛へたる水を汲んで頭から被る、冷骨に徹する許である。年若き主人直八君は土地の有志家だといふ、駐在中の山口君といふのが居られた。途中僕等がもとめた鰻、主人が用意して置かれた鰻が焼けあがる頃は直ぐ眼の前の突帆たる峻峯の頂にわか／＼と月がさし上つた。

話題は主に今年の作柄、罪なき土地人の啓發策などを打ち破つたやうに談々たる話振りは今夜も僕を喜ばせた。肩の凝らぬ話も嬉しく、殊に趣味に饒な西田署長の竹籠を打ち破つたやうに淡々たる話振りは今夜も僕を喜ばせた。

た事蹟が餘りに多かつた、立派であつた。思へばこれも蚕く逝くべき宿命の致す處であつたろう。それにしても今にも往く、遇つて膝を交へて徹宵別後の情も語らう、相共に激勵して髡るゝまでは社會の戰士たらう。それがもう旬日の間にあると其愉快を予想しつゝ心は既に湘南の空に飛んで居た、なつかしき君の傍を胸に描いて居たのに何故遇はない中に死んで了つたのだ、死なねばならなかつたのだ、君には未だ世に對し人に對して爲さねばならぬ約束が多かつた筈だ。

役にもたゞぬ涙が双頬を傳ふて奔り下つた。それを拭はうともせず僕は手を拱いて月下に泣いた。

十九日

午前十時紀川丸に塔乗して島間に向ふ、東岸熊野灣の勝景を見むと志して也。同行は管内巡視のために出張せらるゝ西田稅務署長と阿兄と三人。此日天氣晴朗なれども東北の風吹いて波高く船体常に三十度の傾斜を保ちて進行す。甲板に立ちて眺むれば左方一帯の岸には磯黃揚其他名も知らぬ散木の刈り込みたる如きが一面の芝生の間に點綴せる宛然配置よく植え並べられたる自然の庭園を見る趣がある、右舷は渺漫たる海白波高く天をうつ。談笑指呼の間前方廻に屋久島の崔嵬

前栽の草木におく露滋く、虫頻に鳴きて靜に美しく趣のある夜であつた。

二十日

朝早く目ざめて田圃を逍遙す。紫の夜の露未だ峯々を離れず、見渡す稻田稍々黄ばんで、海島の秋漸く闇け、珊瑚として脚に碎け散る露が冷たかつた。

食後主人を勞して東道の主となし竹崎の釣場を案内して貰ふ、直八君は身長短小にして久しく刈らざる頭髪耳を蔽ひ、動せざる眼光炯として強き音聲腹のどん底より押し出るやうな人也。重々しき口を開きて一言一句苟もせざる時人をして覺えず襟を正さしむ。常に用意あり、餘裕のある人物と見た。今日は裸足にして竹籠を背負つてゐる、頗る脱俗の姿風がある。

畦路を行き、小山を越え、ざく／＼脛を没入する砂丘を超ゆれば海の渚に出づ。返しては寄せ、寄せては僻くる女波男波を蹴つて進めば大岩石の山が屹立してゐる。巉岩突帆、奇峭敢へて近づきやうもなく見えるに僅に足の爪先を踏みかけ辛うじて攀ぢ登るやうに研りかたがつけてある、ろこを腹這ひのぼり斜峭たる巒角の間を通ずる羊腸たる道を傳ひゆけば海に面したる山の中腹に出づ、觀望すれば漂渺たる煙波天と連な

(八十) り、溶々たる海深く藍を湛えて居る。須臾にして、かせの岩屋に到る。大巖石傘扉の如く上を蔽ひ、海に面せる方岩柱立ちてこれを支へ自然の洞門をなして居る。

（未完）
夏は満池蓮花華くと云ふ、今は蘆の枯葉と共に、淋びしく秋風に鳴つてゐた。

（泳いで暗き中をゆけば胸は尚ほ遠く續いて洞門が七つもあるといふ。岩屋の中は水極めて静にして自然の避難場をなし、外海の激浪濤濤にもまれて疲れたる魚

は皆こゝに集まる。上と前は自然の傘と壁がある、雨風の日も何ともない、寔に絶好の釣場である。此日も二

三十人處角の處々に陣とりて綸を垂れて居た、水中眼鏡をかけ、又又を手にして水面に腹這ひ海中を覗き歩き蛸ろの他の獲物を探す者も居た。悉皆蟲をしたやうな色をして眼ばかりぎよろく光つて居た、さながら河童だ。岩屋の中は這般慶に静だが洞門の外は碧渺漫たる大海眼を遮る者もなく直に亞米利加大陸に連るのである。自分等の立ちて居る大斷崖のさながら城廓のやうに突き出でたる鼻柱に山のやうな大濤がたへずうち寄せて來り、白沫巒を噛みて奔騰激越し、塗湧濤蕩する様、百万斤の綿を碎き、雪山の頽斜るゝもかうはあるまいと思はれる。駭目の壯觀である。

壯觀！奇觀！然り世界の壯觀であると思ふ。

詞藻

漢詩

中秋十三夜吟

和中山蜻洲韻 雙峰 入部龜治

江風松月酒杯前 湖碎清輝激灑鮮 空洞急聞栖鶴叫

空裏流霜洲渚風 月前對酌樂無窮 扁舟一棹興頻動

笑駕金龍向峽中 一聲々落水中天

和歌

中秋十三夜吟

和中山蜻洲韻 雙峰 入部龜治

江風松月酒杯前 湖碎清輝激灑鮮 空洞急聞栖鶴叫

空裏流霜洲渚風 月前對酌樂無窮 扁舟一棹興頻動

笑駕金龍向峽中 一聲々落水中天

月夜虫

田上晴蛉

中秋十三夜吟

和中山蜻洲韻 雙峰 入部龜治

江風松月酒杯前 湖碎清輝激灑鮮 空洞急聞栖鶴叫

空裏流霜洲渚風 月前對酌樂無窮 扁舟一棹興頻動

笑駕金龍向峽中 一聲々落水中天

○夢の鳥

白鳥亭十惡

夢の鳥籠に囚はれ青雲の彼方に待てるわれを知らなく。

死せんとし死し得ず今日も歌よみて心の缺をつくろひしひみ。

子どもなり親どもなりて人の道人みなみに葬られ行く（曉村氏に）。

ならはしの力に壓されならはしをたゞならはしこじまかせる人。

しむらを遂げば遂げ得ん葬むるにわが青春はいと尊かり。

自覺なく意識も意志も共になく生れしめられ生きしめられて。

われを戀ひわが名を呼びて死せしてふ者もあるやと過去帳をくる。

「あはれとも思ふ」心にあはれるなる者としきば悔なし

（完）

○曉村氏のもと

白鳥

泣き止まぬ子にてありけむ歌よみて高く理想にあこがる君。

と思ふ。

「男てふ驕」奔りなみなみの人の如くになりはつるど
も。

「この世をば」ウオゾォースともトルストイ、ツルゲ子
フともわれ妨げず。

「かくひとり居る」てふ驕得てしがなわれ弱者てふ自意

識に居る。

「人知れず葬らまほし此心此心こう悲しみのたね。

「妻もちぬやがては」辛き人の世の倦怠をこうなめ給ふ

らむ。

もづれ糸とけし相にやつれます君見るたびにわれ戰慄
す。

(完)

○ よろこび

牧 喉 村

ばのかにも溜息すらし夕顔の白き花ゆれ闇夜と
なりぬ
心はもややともすれば野をはしひ林をかけると
き風のごと
螺よわれみにくき殻着濁水のきたなきなかに居
よげにす居る
放たれし二なるかなしみ野分ともせころえらま

しばくも市の心に汚れては入らむと思ふ霧島
の山
帆をまさてわれ漕きくればよる風うす靄はれ
ぬあけばのゝ海

よろこびは湯氣をへだてゝ春の山見るにも似た
りおばつかなくも
明暗のさかひにする族のごとかばたれときを
われなつかしむ
くらやみのなかにかゝれる一線をゆくにも似た
りはて之も分らず

俳 句

縁 波

秋 雜 吟

城

檣

すのし羽しゆかむ

かぎりなき旅のいのちのろの秋のかゝる夕と雲
見て思ふ

餓え疲れ荒磯邊なる船底に旅の女と寝けるうの
ゆめ
盲ども指もて光り搔いさぐるいのちう人はかく
うとましさ

この日ごろ獸のごとくあさましさまにある日
の漸く多く
心ゆく空とてなけれ茫としてわがゆく眸を百舌
鳥の居て鳴く
露にはふ七草野ゆき栗ひろひ松葺狩りし築波野
の秋
うら若き管笠姿二つして日光に入りし秋の日の
くれ(以上二首野州古橋義令に與ふ)
榛林かれ落焚きつゝ鳥の音に耳かたむけし冬の
木曾路(下毛青木秀三郎に與ふ)
父戀いし病枕邊にわれを喚び男の子の道を説き
ませし父
病み臥せる身を憤り聲はげしげしかりける御
父おもう

雑 報

◎ 市況 一般

加治木の町は眠つて居る、肥薩鐵道の全通期を目の
前に控ながら町民の深いく夢は未だに覺めない。
事實我が町の現在は寂寥である。之れで大隅第一の都
會とは思はれない、が淋しい中で比較的客足の多いの
は日用品を商ふ菴物屋は別として、吳服屋、履物屋、小
間物屋位のもので、いづれも當地婦人連の少なる虚榮
心を満たす可く物品を供給して居るのは加治木村全体

馬首に雲高し吳の秋越の秋
たろがれて霧やゝ遙る櫻島
霧霧れて見上ぐる秋の藏王嶽
しばらくは霧に宿貸す無住寺
朝霧や温泉宿の寝覺め哉
稻の花送り迎えて滝車の窓
秋風や故山を望む滝車の窓
月白き夜を別府川の下り舟

(一十二)

城

檣

の経済上から観るとさ程喜ばしい事でもないよーだ。

從前より加治木物産の主となつて居た鑄物は近來どんと駄目で當地鑄物業者の大部は鹿児島市松元商店の爲に壓伏されて只今では、より以上の進歩とか發展とか云ふ事は夢にも望まれ無い。此の間に處して濱田、森山鐵工場主と森山氏（上場）等がこれゝ大島、沖繩等へ販路を擴張し相應の好結果を収めつゝあるのは心強い次第だが今一層の發展を願つて置く。結局加治木鑄物業の盛大を圖らむと欲するならば宜しく同業者一致和合して一つに資本家の投資を仰ぎて差當り松元の羈絆を脱するのが急務だろうと思ふ。全く名産の一たる製紙業は依然として舊慣を脱せず、天神馬場紙の聲價今果して奈何と怒鳴り度くなる。次に龍門司焼は前途益々有望だけれど鹿兒島市場の外他に輸出せぬのをみれば未だ規模が少い過ぎるとしか思はれぬ。

其他生糸場、授產場等は相變らず盛んに事業を經營しつゝあるが、米俵検査の實施に次いで豊作の爲價格

の暴落を來たしたる當地米界は閑散で活氣が無い。近來只一つ喜ぶべきは町内に醤油屋、芋焼酎屋が増加して縣内各地へ販路を擴めつゝある事で今後益々發展の

見込があると思ふ。

要するに當町民の過半は中學校諸官衙、生糸場等を宛に商業を營んで居ると曰ふても差支えぬのである。例の實業俱樂部が先般中町に移轉して姶良郡米商組合への貸家として存在して居るなどは何處迄も加治木式だ。

金貸しするばかりが桜街富家連の本能でもあるまいから皆が今少しく利目して小杉藥店や佐藤肥料商店の如く積極的にやつて戴きたいもんだ。

◎島津男爵の着英

七月廿一日横濱出帆渡歐の途に就かれたる島津男爵は去る九月十九日無事英京ロンドンに着せられたりと云ふ

◎川上親晴氏の就職

前富山縣知事川上親晴氏は休職後京都の自宅にありて閑散の日月を過こされつゝありしが去る八月和歌山縣知事に就任せられたり

◎始良郡產米検査實施狀況

鹿兒島縣令第三十六號を以て發布されし米穀検査規定は去る七月一日より實施され數年前來縣下各郡米商組合に於て米俵の改善を圖りしも京阪市場に於ては未だ

協議の結果一俵五錢づゝ小作人に與ふる事となりしも從前より裸米にて受取りつゝありし我が村にては殊に金十錢を與ふる事に定めたり。

◎郁文館の紀念會

郁文館にては七月廿五日創立二十週年記念會を開催したり。先づ入部館長の開會の辭に次いで上野、貴島、牧の三氏及び青雲舍總代中摩直一有爲會總代大山常藏両氏の祝詞にて開宴せられ薩摩ナンコ輕氣球の飛揚等ありて中々の盛會なりしと云ふ。

◎加治木の祇園祭

△六月燈、七月三十日は例年の通り濱町八坂神社に於て最も嚴かな祭典を行ひ夜間は精巧華麗を極めたる花燈籠幾十となく点せられ宛ら白晝の觀あり老幼の參拜者引も切らぬ繁昌に加へて氷、西瓜、菓子、等の露店は所狭き迄に列べられ左しもに空闊なる境内も局摩

因に小作人より地主に取ひべき小作料は村に依つて區々なりしも米穀検査規則實施の結果俵裝米にあらざれば授受の出來ざる事となり姶良郡西部五ヶ村に於ては

ありしと雖取獲に於ては全縣下を通じて最高位なるベし。

徐ろに濱町の神殿を發し西町に出で毘沙門町、今町を

め鮫島事務官補、岡山縣屬、大山郡長並に各村長有志等無庶四百余名の會集にて、午前には先づ戊申詔書の御趣旨より其内容に就きて平易明細に説き、二十餘億

再度の祭事を終りて還輿に及び順路を濱町に取り桜城

全街を残る隙なく通御の後當年の當屋元なる垂ノ口町

立山恒右衛門氏の祭殿へ鎮座されぬ、△二日目の發輿

、翌一日は前日同様の行列にて順序整々豫定に遅れ

午前十時過ぎ立山氏の祭殿を發輿黒川の假殿に向はれ

暫時休輿の上還御と爲り普く町内を通遇して濱町の本

殿に目出度く着輿されしは午後四時頃なりき、△晝夜

の光景、両日共神輿の通過を拜觀せんものと村内は勿

論隣村より蝶集せる者夥しく沿道は素より黒川附近は

非常の人出にて殊に夜間は仁輪加の催しありて町内を

練り歩き當屋元附近一帶の街路には六十餘個の生花の

陳列あり蒲生田有志の寄附に係る大角燈、球燈は眩さ

までに點せられ之を觀んとて集る老幼男女緒の如く却

々の混雜を極め近年稀有の盛況呈をしたり

◎金森氏の勤儉講話

豫て内務省より勤儉貯蓄獎勵の爲派遣游説中なる金森通倫氏は、去る七月下旬本縣に來り、各郡箇所在地に於て右講話會を開きけるが、當地は八月一日中學校新築の雨天体操場に於て開催されぬ、當日は阪本知事を始

したるが出會者五十余名頗る盛會なりしどいふ
等無庶四百余名の會集にて、午前には先づ戊申詔書の御趣旨より其内容に就きて平易明細に説き、二十餘億の國債を有せる我國民は堅揮一番奮て償却の道を講せざるべからず、然るに其方法たる唯勤儉貯蓄の外他に道なきに及ばし大に其實行を促されしが、中にも尙ほ吝嗇の別を説きて吝嗇家を警醒し、殊に貯金には餘りたら、儲りたら等タラの極めて禁物なりと云へるが如き、説話熱心巧妙にして比喩又適切、時恰かも盛暑數時間に亘れりと雖何れも倦色なく正午時に至りて一先閉會せり、午後は一時より開會、男女小學校高等科生をも加はりたれば午前に優る盛會にて、貯金に就き世界列強の實例を擧げ少年兒童をして深く勤儉の必要を覺らしめぬ、終りて知事事務官補等は歸處されしも各村當事者有志等は更に集まりて交談會の催あり、先づ金森氏より各村々治及貯金の現況、並ニ特殊の施設等に就き詳細なる質問あり之に對する村長農會長の應答あり、尙氏は全國遊説中其見聞に就ての感説あり互に得る處ありて全く閉會せしは午後五時頃なりき。わゝ勤儉貯蓄の説や甚た古くして其意は即ち新なり要是唯實行に在るのみ、

◎有爲舍員の送別會

青葉若葉に風薰る夏は過ぎて、桜城の秋は未だ淺い

此頃、有爲舍では九月三日不日上京すべき左の三氏が卒業祝と送別會とを黒川岬頭なる小杉氏の別墅で開いた。立山甚藏（慈惠醫學士）入部泰藏（高商專攻部）新名忠（農科大學）、

遲々たる夕陽漸く春き始め、暮靄徐に錦江の波上に立たむとする頃、先づ大山常藏君（在七高）が熱誠を披露した開會の辭に次いで入部君が簡単で要を得た極めて謙遜なる謝辭があつて開宴せられ縱談横議歎酬矢の如く或は歌ひ或は舞ひ、和氣洋洋三拾幾人の口から同時に起る笑聲は幽寂なる黒川の山岳を撼がすばかりだつた。やがて各自各處に詩を高吟し、軍歌を怒鳴り、箸戦を初める、それより又快談、放言、興いつ盡くべしとも見えなかつたが早やくも黒川岬の夜は更けたので誰れやらの動議に従ひ三氏を胸揚して目出たく散會した。

◎青雲舎の送別會

青雲舎にては去る八月廿日午後二時より海軍兵學校へ入學の八代祐吉陸軍地方幼年學校へ入學の石原久敏東京工手學校へ入學の中村敏世、三舍員の送別會を催う

◎有爲舍員の送別會

青葉若葉に風薰る夏は過ぎて、桜城の秋は未だ淺い

此頃、有爲舍では九月三日不日上京すべき左の三氏が卒業祝と送別會とを黒川岬頭なる小杉氏の別墅で開いた。立山甚藏（慈惠醫學士）入部泰藏（高商專攻部）新名忠（農科大學）、

遲々たる夕陽漸く春き始め、暮靄徐に錦江の波上に立たむとする頃、先づ大山常藏君（在七高）が熱誠を披露した開會の辭に次いで入部君が簡単で要を得た極めて謙遜なる謝辞があつて開宴せられ縱談横議歎酬矢の如く或は歌ひ或は舞ひ、和氣洋洋三拾幾人の口から同時に起る笑聲は幽寂なる黒川の山岳を撼がすばかりだつた。やがて各自各處に詩を高吟し、軍歌を怒鳴り、箸戦を初める、それより又快談、放言、興いつ盡くべしとも見えなかつたが早やくも黒川岬の夜は更けたので誰れやらの動議に従ひ三氏を胸揚して目出たく散會した。

◎教育意匠品展覽會

九月八日より同十日に至る三日間桜城女子小學校に於

て始良郡教育意匠品展覽會を開設せらる出品點數総て百十六點にして之れを教授、管理、訓練、運動、衛生、實業、參考品の七區に分ちて陳列せり之れが審査委員

◎有爲舍員の送別會

◎有爲舍員の送別會

として本縣師範學校木下教諭囁托され審査の結果甲三 黒良伊佐二郡尋常科正教員の補習講習會は七月廿日より九月十四日迄加治木中學校に於て相良校長管理の下に開設せらるる會員は總て四十八名ありて講習科目は地理、歴史、理科の三科なりき。去る十四日午后二時より之れが終了式を擧げられ相良校長の會務の報告に次て四十八名に悉く終了証書を授與し其日臨席せる齋藤縣視學の祝詞演説にて全く式を了へ一同茶菓の餐應を受けて退散せり。

◎慈善音樂會

林出大仙氏の設立に係る鹿島孤兒院の慈善音樂會を七月十九日より三日間當町定席に於て開かる我が婦人會員諸氏は之れが援助として東西奔走大に尽力されしに依り頗る盛會を見るに至り其收入の高は殆んど百數拾圓に上りたりと云ふ

◎松城男子小學校同窓會

是迄にて閉ち次に琵琶の餘興と茶菓にて本日の會を開づべきことを告げ序でに本會は母校を出て三種々の方面に向ひて研究しつゝある人又は學業を了へて直接業務に就ける人々が各方面の知識と經驗とを有して歸り來れる者此堂に集り互に所感や實際やを談合し以て久闊の情を温むると共に一方には相互に啓發し發展するを以て主とするが故に本會の隆盛は獨り母校の面目なるのみならず各自得る處鮮少ならざるべきを以て苟も同窓生たる者は御互に此精神を有すべきことを希望し直ちに琵琶の餘興に移りた奏演者は長崎醫學専門學校在學中の壹岐鶴吉君であつたが殊に演奏者が強く朗なる音聲もていと熱心に慷慨に奏演されしが故に會員に大なる興味と感動とを與へた終つて茶菓に移り互に新舊の交情をあたしめて午後二時頃散會した、

◎谷山安樂兩氏招待會

去る九月六日午後四時より夏季休暇にて歸省中の東京第一高教授谷山初七郎學習院教授安樂直治の両氏を當町實業俱樂部に招待して懇話會を開けり出會者十七名上野氏の挨拶ありて開宴、互に胸襟を披ひて懇談歡話

講堂に於て開催された出會者凡七十余名午前十時開會原田會長欠席なるに依り白尾訓導（彦助）開會の辭述べ直ちに會員の談話に移つた。先づ會員人部泰造君は自分は談話は極めて下手なれども所謂聞上手になつて貴ひたひ云々の挨拶を述べ次に英雄豪傑たる者の要素

スマーチにかりして青年輩の以て學ぶべく以て勵むべきことを論述し、次に田方貢君は死と云ふ題目の下に世間の多くは死に就ては一種恐怖の念を持てるを誤りとし死は永久の眠りに過ぎずと斷定し死なくんば社會の進歩發達人生の興味は得て望むべからず死ありて始めて人の世の面白味あるを云ひ「死は神が我等に與へ給ひし恵なり」てふことに歸結し續て福永秀彦君は人には睡眠が余程必要であると云ふことを大に就ての實驗説より説き起して生理上注意すべき要點を論述せられた次に當校訓導貴島佐吉君は當校に於ける職員生徒の狀況と一般學事の現況などを報告し最後に本會は獨り演説者の多少に係はらず互に一致和合して新舊相談し以て知識交換意志發展の道を謀るときは以て無上の面目たるべきを述べ續て白尾訓導は立ちて談話は一先づ

肥薩線の貫通に就ては、天下稀有なる矢巣隧道の難工事を控え居ることとして、數年前よりして其竣工は来る四十三年の三月なり、或は二月なり一月なりと唱へ來りて、縣民舉て其一日も早からんことを希望しけるが、事實は工事大に進捗して此程に至り愈々來る十一月二十日開通式舉行に確定し、既に本縣にては協賛會を設け、金百圓以上を醵出したる者又は評議員會の決議に依り會長の推薦したる者を特別名譽會員とし、參拾圓以上を名譽會員、拾五圓以上を特別會員、五圓以上を正會員、壹圓以上を贊助會員とし、郡市民中よりそれら委員を定めて會員を募り醵金を集める等準備をさく怠りなく、當日は盛大なる開通式を鹿兒島停車場前に於て舉行せん筈にて、招待者千數百名に達し又鐵道廳よりの招待者六百名に上り遞信大臣を始め貴衆兩院議員の來る者二百余名、東郷大將樺山大將も來り上村中將伊集院中將も來り中外の貴賓珍客多く、加ふるに我第一艦隊、及英國艦隊約四十隻錦江灣に集合して開通式に景氣を添へん筈なりと其盛況偉觀想ふべきなり、

此に本縣は始めて新生面を開くべき機運に接し得たる。千古未會有い盛事なれば、我村民も又此舉を賛して共に大に祝すべきなり。而して當日は我村民は更に當停車場に集まり盛なる開通式を舉けん筈にて今や其準備中なり、然るに唯其祝すべきのみ知りて遂に利器利中道を講せずんば則不可、こゝ大に村民の奮起を要す、

◎ 加治木一郷軍人秋期総會

九月廿四日、全秋期例會は、午前は網掛川尻に魚獵をする苦なりしも生憎雨天なりしかばおぢやんどなり午后時より天理教會に於て會合を開きたり先づ溝口副會長開會の辭ありて新納海軍大佐は例によつて在郷軍人の心得べき條件を説述し次に石神村長本田克氏の挨拶、杉田醫師の十二指腸虫に關する有益なる講話わり、最後に小濱理事の會計報告、協議を經て宴會に移る、餘興として川畠氏の琵琶演奏あり、散會せしは薄暮点燈時刻なりき。

◎ 常務學務委員の更

常務學務委員岡山猪治氏は昨年就職以來熱心勤務されしが今般氣の故を以て辞職され其後任には白尾盛衛氏推選されたり

し去る九月廿六日は之れが合祠祭を執行したり、竹下齊主の祝詞に次いて老山神官其他の奏樂終え餘興として太鼓踊の奉納ありて近村よりの見物人多く露店等も賑かに見受けたり、殊に同字特有の曰太鼓は、多數の人々に一種言ふべからざる興味を與へぬ、因に記す太鼓踊は近來大に衰へ、終には由緒ある太鼓踊も影も形もなくならん、お祭験とは云へ一方より見れば馬鹿騒なれども、他の縣に於ては労働者の慰勞として盛に之を舉行するを見る處なるが我村に於ても一は労働者の慰勞とし、一は之が爲に多數の見物人を他より引くを得ば我村の繁榮の一端ともならんか、然れば少々の費用位は一般有志より補助するとも再興ありたるものなり

◎ 中馬龜助翁の退隱

松城男子小學校使丁中馬市兵衛氏(龜助翁)は明治十二年就職以來今日に至るまで正に三十年の久しき間一日の如く忠實に勤務され人皆其の操志には感する所なりしが今般遂に老衰の故以て辭職し靜に餘生を送るほどなれりと云ふ

◎ 編輯員懇親會

本誌編輯部同人は、去る陰曆八月十四日晚景より、近

◎ 本秋の農作

米作は七月上旬苗の植付以來晴天續きにて稻の發育宜ろしく農家は空前の豊作を豫期せしも八月上旬以降は降雨繁かりし爲に株立頗る弱く十月より始め稻の熟期に浮塵子の發生を見ると雖とも目下官民力を戮せ之が驅除に勉めつゝあれば其害又甚しからず矢張半年作以上の収穫を見るに至らむ。島作は今秋以來風害を受けざりしも毎日の降雨の爲に育頗る悪しく栗、蕎麥等は先半年作を見て可ならむ其他果物類は結實甚豐かならず雖とも風害を受けざりし爲に其形狀至りて美事なり

◎ 小山田大井上神社の合祠祭

今般内務省の訓令に依り無財産の神社並に無格社等自然荒廢に歸し神社の尊嚴を汚す恐れあるものは他有格社に合祠する事となりたるが氏子に於ては神社に附屬する財産の關係上又は多年崇拜せる神社を他に移轉するは情に於て忍びざる點ありて合祠を喜ばざる風あり。當局者に於ては之れが斷行を促がしゝが小山田にては他に率先して同地宇市來原奉祠の荒人神社々河内に奉祠の加賀神社を全村大井上神社に合祠

十一時頃なりき

◎ 仔馬品評會

姶良郡加治木村にては九月廿九日午前八時より春日原にて第六回仔馬品評會を開催せり、出陳數は牡牝百三十四頭にて内牡馬の一等賞は大字小山田山下市右衛門、二等賞は大字西別府前畑甚四郎、榎谷三左衛門、三等賞は大字反土馬庭仁助、大字西別府田中源四郎、外村藤右衛門、の三氏、牝馬一等賞は西別府田中綱家、二等賞を全く西別府原田佐吉、東仲右衛門、坂元四時過ぎ神村支所長式辭を述べ前田副組長の審査報告、褒賞授與、大山郡長告辭、安満性應寺住職の祝辭、次で有馬縣聯合會技手の馬匹飼育管理上に關する益なる講話等ありて式を終へしは中秋三五の月將に山端

◎不幸の一家姉弟の孝行

當村濱町に船乗業を營む森新次郎と云へるは女房某との仲に長女キワ(三十)を頭に男女五人の子供を舉げ覺束

なげに活計を立て居たりしが杖柱とも頼みし新次郎は今より六七年前中風症に罹り苦しさ中より様々に治療

を加へたれど藥餌の効なきのみか次第に手足は素より

口さへ自由を失ひて遂に病褥に伏するに至りたるより

左らでだに貧しき家計は更に一段其度を高め今や朝夕

の炊煙も心に任せねば女房某の悲しさ苦しさは何に譬へん様もなけれど吾れと心を勵はして骨身を惜ます憂

き艱難孱弱なる女性の織手一つに辛くも幾年を送りし

に一家の悲運はこれに止まらず可憐や女房は年頃の心

勞に痛くも健康を害し夫と枕を列べて打臥せしが病勢

は次第に募り來て可憐の病夫と可愛の子供に無限の思

を遣して歸らぬ旅路に赴きしは二年以前の卯月頃唯さ

へ濕めり勝なる五月雨の袂を絞る父と子が何と思案も

盡き果てゝ途方に暮るゝ悲慘の光景を親族の者や近隣

の甲乙に慰められて北邙一片の茶毬に附し後世懇ろに

吊ひしが新次郎は我身の藥餌は兎も角頑是なき子供の

飢を救ふに途なきより痛く屈托し父子五人が現世なか

らの餓鬼道に枕を列べて死すひとか前世如何なる惡報

つゝ其孝心を喜び嬉涙に咽びけるを人々聞傳へて嘆賞し居る山尚は新藏は目下尋常四年とて學力品行共に優等なりとは信も可憐の一家にして實に感すべき姉弟と云ふべし

◎臨時村會

去る一日青雲舎に於て臨時村會を開き先づ學務委員の補欠選舉を行ひしに白尾盛衛氏當選し、次に村有基本財產及村稅整理委員を選舉せしに池直一、是枝快旁、上村興八、濱田清助、神村竹五郎、池上金右衛門、原田耕夫の七氏當選せり、尙今回買上たる元郷友會議事堂の名稱は加治木俱樂部と名命することに決せりと、

◎各學校への入學者

新名忠(東京農科大學)追斗藏(陸軍經理學校)八代祐吉(海軍兵學校)石原久敏(熊本地方幼年學校)中村敏也、川原時雄(東京工手學校)東秀彦(東京岩倉鐵道學校)

◎比志島源一郎氏逝く

會員比志島源一郎君は九月廿二日脚氣衝心を以て京都

の客舎に逝けり。氏は本村萩原に生れ去る三十五年郷里の中學を卒へ熊本高等工業學校に入り四十年業を了

◎編輯日誌

九月十五日 晴

午後四時より第一集會を開く。出席者は長谷場、曾悌、曾新、宇都宮、岡山、津崎、城川の七

にて斯くは幸なき運命より四苦八苦の憂思ひに枕も浮

ふ許りなり斯くと聞きたる女房某の實弟今田某は素より慈仁なる者なれば種々扶助を加へ親しき身寄の者と相談し當時七歳以下の小供三人は一名づゝ親族の手許に引取り養育する事となりたれば新次郎の満悦限りなく昨日今日と暮らす中早くも去年の彌生となりたれば

人々の勧むるまゝ長女キワは製糸場櫻島館の工女に雇はれしにて來従順の上惻惻の稟性なれば主人の氣受けも悪しからず毎朝早天に工場に通ひ其後にて長男新藏

(二十)は父に食事を佑め両便の始末までなして毎日怠りなく桜城尋常小學校に通ふものゝ留守は病める父一人

手足の利けぬ病驅にて今比は晝食其他に定めて不便を感じ給ふべしと案し煩ひ放課の號鐘を待兼ねて一目散に馳せ戻り病父を慰め勞はりて實姉が歸宅の折に買ひ来し心尽しの美味を必ず父の食膳に上し聞き得たる浮

世懸と學校にての出來事等を互交に左右より物語りて父を慰め足腰を摩る殊勝の振舞は一年餘の今日まで聊

かも渝りなく益々病父を大事に敬ひキワの得たる僅かの給料にて藥餌を辨ト偶々隣家より貰ひ受けたる菓子

あれば悉く父に與へ加之浴場より漬き洗濯まで一切丸手を借らざ姉弟が健かに働くより新次郎も薄命を嘆き

臺灣挑子園警察署一角湧支廳在勤巡查小野伸一氏は生蕃討代隊第四分隊に屬し挑子園廳管下馬武德方面帽盆山攻撃中八月十六日午前第五時蕃賊の打出す彈丸のため胸部を貫通せられ生年僅に廿有二歳なく忠死を遂げられしが九月十一日郷里に於て盛大なる遺骨埋葬式ありたり。

◎小野伸一氏の殉死

小山田市來原の人鳥丸金太郎氏は歩兵第二十三聯隊附一等卒として韓國守備隊に加はり渡韓中去年八月行軍中河に陥りて行衛不明となり本年八月郷里に於て盛大なる葬式ありき。

◎鳥丸金太郎君逝く

新名忠(東京農科大學)追斗藏(陸軍經理學校)八代祐吉(海軍兵學校)石原久敏(熊本地方幼年學校)中村敏也、川原時雄(東京工手學校)東秀彦(東京岩倉鐵道學校)

午後四時より第一集會を開く。出席者は

長谷場、曾悌、曾新、宇都宮、岡山、津崎、城川の七

名也。曾木法學士は病名か判然せぬから近い中京都へ行くとか話して居られた。皆衆が方々からの通信や投稿が案外多いのに驚いた。各自雑誌の分擔を極めて、花が咲いて夜の更くるを知らなかつた。出席者は宇都宮、曾新、曾悌、前田、城川の五名

九月廿日 第二集 午後七時より、

朴念人は皆が集らぬうち一寸顔出して直ぐ歸えられたろうだ、本夜も曾木法學士の三高、京大時代の論談に花が咲いて夜の更くるを知らなかつた。出席者は宇都宮、曾新、曾悌、前田、城川の五名

九月二十五日 第三集

出席者は長谷場、岩城、曾悌、曾新、牧、岡山、前田、宇都宮、城川の九名也、今夜雜纂迄を切りあける積りだつたが思ふ様ゆかなかつた。珍らしく月が皎々と昇へわたりて虫が鳴く。蚯蚓が鳴く冷々と涼しい、上京中なりし岩城先生が見へ朴念人が顔を出す今夜は大分顔揃いなので話もはづんだ。小山田に合祀祭の大鼓踊があると云ふ話から大鼓踊の復活論になつた。有名の加治木踊りも此のまゝ捨てるのは實に惜しいもんだと嘆息する者があるかと思ふと誰か大鼓踊りは許すが白粉を塗る事丈けは禁ずるといつたげな。それではものにならぬ、ぢたい色の黒い顔を明るみの中に出

に賑ふた。

昨宵も「チシッソ」と深更迄三弦を彈くやら歌つたりして居たが今夜も亦相變らず盛にやつて居るのが遠くも隔だつて居ないし、それに風の吹きまはしが宜いので

オッヤ節やら、バンヤ節など手にどるやうにきこえる。

年が年中孜々營々として金もうけに他意なく人生の歡樂を心より解せざる者もあれば、われくの如く氣の利いた世間から見たら嘸馬鹿げて一文にもならぬ様の下の力持ちに禿筆疊んで、せつせとやつて居るものある、世はさまぐなものだと」といふ泣言みたいな事だ。

九月卅日 夜
今日來た雑纂の材料を清書し、雑報を皆衆が思ひ出しき紙數が隨分たまつたようなので計算して見たら大抵出来たので十一時かへる。

讀 者 の 聲

△前畧先日は雑誌桜城到着致し嘻しく珍らしく五十分の数多き記事も何となく物足らぬ心地致し一度ならず再三拜讀致し居る次第に御座候彼の個人消息の處などオヤーと云ひ度き記事に日々出會ひ申候特に今回は重久君など執筆せられ候て一入面白く通讀仕候成る程専門的學府に於て收得せし丈けあるわいと切に感心致候斯く姓名が分明すれば讀むにも一入感トを好くする様に候尤も豫ねて承知の雅號に接しては早速合点參り讀むに大分氣乘り致し候が烏子とか柳洲先輩とかつも出る軒燈問題や電話、電燈問題の議論に花が咲い

しては見られたものではあるまいと否難したら、されでは薄く塗る事にしろと云はれただけなど、下らぬ田舎話になる。岩城先生の東京話に花がさいて、九段坂の川上大將の銅像から鎌倉の大佛、福岡の日連のうれからうれと縁の糸をたくつて飛んでゆく。と、伊藤公の銅像が冥利だけに福原に引すられた迄漕きつけた。こののが落ちて柱に倚り、櫻に寝轉び、茶を啜り、煙草を吸つて唯我獨尊の連中政治談やら教育談やら馬鹿嘶やら話の種もつきぬものである。最もこの間一向机の脇を離れずせつせと執筆中なる勉強家もあるのだ。かくして時の經のもの御存知なしだ。

勝手の方で金右衛門ぢーさんがほろほどしたと見へ「あ」と生呻する聲がきこへるので皆が思ひついたやうに「こワ」わせへ長座した今夜もう宜が加減に切いあげんなら」

廿七日、夜、第四集會をひらく。雨晴れて風冷め

たく、舊曆十二月は始終軒を去らずに居た。

曾悌、前田、宇都宮、棕軒、綠波、津崎、村念人、の七人。外に緒方英吾、小湊秀輔の二君編輯局を見舞はれ、緒方君が得意の快辯を振はれたので編輯室は大

て、いづれも氣焰は高まつて來た。
常務學務委員の人選が畧ば決定したと長谷場氏は報告された。うすべらい「センベ」を囁ちりながら散會したのは十一時過だつた。

十月二日 夜

第六集會を開く、出席者は少なかつたが事務は馬鹿に多忙を極めて目が廻はる様だ。十二時過迄せりせと働くらいて漸やく切る事にした。出席者は岩城、長谷場、宇都宮、津崎、城川の五名

(四十三) 順と見當に迷ひ「隨分或心な事云々男哉」位の外に何等の感無之候然し多數の事なれば思ふ様に參らぬは勿論にて小生等は實以て編輯員諸兄の苦勞の程多謝する次

（四十三） 第に御座候要するに雅號にては面白味無之故可成本名に願度儀は相叶はぬ者に候哉兎に角斯る言論家諸兄が悉く同郷の産と思へば頗る肩巾廣き感致し候願はくは諸兄益々健筆を揮ひ吾人異郷の孤客の渴を慰し給はん事を一（在米 M.S 生）

△加治木町民の覺醒を望む、多少教育ある青年の沈睡は見て居て齒痒くて堪らぬ、肥薩鐵道開通を目前に据へて暢氣すぎる（世界的青年）

△郷友會加治木支部の解散、松原壇田賣却代金分配に付僕は大にいふとがある次號に論じて宜しいか（冥土の友）

△加治木に俳句會を起し大に正派を研究しては奈何（好俳子）

△松下博士の氣骨論面白し、但し奇骨は武士道の根本精髓を体得した人ならずんば共に談すべからずだ（古武士）

△大に諺論する可也。但し非人格無責任なる言辭は斷して不可、教育家たる者宜しく三省しこ省せよ、物

言へば唇寒し秋の風、其精神其氣魄なくして其位置に居らぬとするは身の程を知らぬといふ者也（默思生）

△加治木町民に望む。一、客の取扱ひを嘘でも宜いか

う親切にすると。二、もつと家業を研究し開發すること。三、早く愛想をつかされるよりは長く可愛がれて貰つた方が得なることを眞實感付くこと。四、軒燈を吊すこと一小杉樂舗橋本屋を始め其他重なる店頭に此設けなきは奇怪なる現象也、私利は文明商人の根性にあらずといふことを悟られ度し。五、もつと明るい洗湯をもつと明るい場所に三つ四つ設くること。六、網掛河畔の岸木に塵を捨てるは見つともなき故爲めこと、これは警察其他當局者に於て特に御注意あり度、肥薩鐵道全通の暁は加治木町民として少くもこれ位ることは實行して貰はねど耻の上塗りになるわけだと思ふ（公民生）

△求婚の男子よ！女の父母の地位名望家産容貌學歴の富めるよりもより婦徳に富める者を求めよ、さらば爾は早く淑女を得む、婦人よ！美しい衣服と、空しより幸也（野に叫ぶ人）

△海軍少尉長井清氏は先般横須賀海軍砲術學校へ入學を命ぜらる。

△今春山口高等商業學校卒業の重久定志氏は先般專賣局德島縣池田製造所書記を命ぜらる。

△専賣局垂水出張所長牧清澄氏は此程加世田出張所長に轉任せらる。

△農學士曾木平八郎氏は頃日北海道廳農事試驗場技手に任せらる。

△鹿兒島高等女學校教師曾木はぎ子は先般同校を辭し北海道なる良人の處へおもひかれたり。

△會員壹岐東一郎氏は先般鹿兒島高等農林學校體操教師を拜命。

△神戸浪速銀行支店に在勤中なりし袖木郁之助氏は頃日鹿兒島支店へ轉勤せらる。

△陸軍中尉壹岐桃治氏は韓國守備隊附として本月上旬渡韓。

△醫學得業士福永秀彦氏は、尙研究の爲め九月上旬上京

△會員新名忠氏は農科大學へ入學の爲九月上旬上京

△醫士立山甚藏氏は久しく上京中の處先般來歸省中。

会 员 動 靜

き名ど、遊逸とを却けて最も頼むに足る堅實なる男を求めよ、さらば爾は決して縁遠きを恨むことなかるべし（月下冰人）

- 第一高等學校教授谷山初七郎氏は夏季休暇にて歸省中の處九月上旬歸任。
- 學習院教授安樂直治氏は今夏家族携帶にて歸省中の處九月上旬上京されたり。
- 木誌編輯員岩城豊次氏は所要の爲上京中の處九月中旬歸省されたり。
- 法學士曾木新三氏は病氣保養の爲歸省中の處九月下旬再び上洛されたり。
- 會員入部泰藏氏は夏季休暇にて歸省中の處九月初旬上京
- 會員新名忠氏は農科大學へ入學の爲九月上旬上京
- 醫士立山甚藏氏は久しく上京中の處先般來歸省中。

京。○多年在米中の伊地知季喜氏は病氣の爲先般來歸省中。

◎警視廳獸醫池田彪一氏は今夏歸郷中の處八月中旬歸任。

◎昨年來上京中の木佐貫重彦氏は九月下旬病氣保養の爲歸村されたり。

◎特別會員濱田彥藏氏は商況視察の爲京阪地方へ旅行中なりしが此程歸村。

◎清國北京大學堂敎習野田昇平氏は先般退職の上歸郷中の處頃日上京。

◎特別會員森山藤次氏は永く中止中なりし鑄物業を再興せり。

◎當郵便局員たりし西田武彦氏は不日渡臺の筈。

◎白尾國威、梁幡健、新名常藏、榎木盛吉の諸氏は此程遊學の爲め上京。

◎肝屬郡佐多尋常高等小學校長たりし山上正一郎氏は全郡新城村新城高等小學校長に轉任。

◎森林主事溝口直記氏は先般沖繩小林區署詰を命ぜらる。

○會員の轉宿左の如し

本會基本金寄附者氏名錄

(第十回申込順)

一金六圓 長井 清君 一金五圓 原田 經一君

一金五圓 赤崎興一君 一金五圓 大重雄太郎君

小計金貳拾壹圓

通計金壹千〇拾九圓七拾貳錢也

○雜誌代領收

一金壹圓、有馬助次郎、川畑助右衛門、松田吉左衛門の三君

一金壹圓、山上庄次郎君

一金壹圓宛、金澤彦太郎、上床新助、佐藤嘉太郎、寺

師孫四郎、壹岐鶴吉、大内山精太、永田盛治、岩田

靜夫、竹下善七、山上正一郎の十君

一金八十五圓宛、白尾源治、松田祐吉、竹下貞一、池

上金右衛門、江口彦五郎、大迫金藏の六君

一金六拾五圓、溝口一次郎君

一金七拾五圓、有馬助次郎君

入部泰造、森山彦太郎、山崎嘉太郎、波多興八、市來新、法元一郎、生駒喜之助、佐藤新太郎、横山惠、美坂猪之助、前田清之助、立山岩太郎、金澤清次、

東京府豊多摩郡字東大久保二六、二號宅間德二君	東京四谷區南伊賀町八四、	上村武治君
新瀉縣高田町木築三五	曾木豐二君	曾木豐二君
横須賀砲術學校學生寄宿舍	長井清君	長井清君
東京府南葛飾郡隅田村字隅田四二	松下利彦君	松下利彦君
奈良縣磯城郡櫻井巡查部長會所	池上新	池上新
清國安東縣安東新報社內	永長新之丞君	永長新之丞君
北海道札幌北海道廳農事試驗場	曾木平八郎君	曾木平八郎君
專賣局德島縣池田製造所	重久定志君	重久定志君

在外本誌講讀者住所氏名

(申込順其八)

東京麪町區飯田町六ノ一〇 石原市二

韓國元山永興灣海軍防備隊 湯淺眩吉

東京牛込市ヶ谷河田町女醫學校寄宿舍 入佐とき

東京牛込早稻田南町十七番地 原田孫助

東京近衛步兵第三聯隊第十中隊 法元辰次

横濱市元町五丁目一八一、 N. S. W. Australia

東京青山原宿一八一、 伊佐郡菱刈村湯之尾築地

水間勘次郎 濱川眩助

東京青山原宿一八一、 N. S. W. Australia

上村武治、濱川眩助の卅一君

一金五拾五圓宛、森山熊助、竹下平右衛門、佐藤彥藏

曾木翁助、中山親交、池盛知、本田源三、高橋眩太郎

郎、椎屋武八郎、立山淺太郎、松永嘉次郎、吉井

常太郎、大迫武八郎、長井利男、下津佐正治、松元

正治、豐留清助、山崎秀清、岩穴口新助、豐留龜助

、城敬治郎、宮尾金右衛門、吉信友造、沖崎喜右衛

門、杉田靜治、郡山政行、牧清虎、木塙仁之助の卅

二君

一金四拾五圓宛、美坂助右衛門、前田武二、中村與一郎

、池上新眩、竹下鐵之丞、竹下武夫、久保丑之助、上

床幸助の八君

一金參拾五圓宛、原田源太郎、入佐トキの二君

三君

一金參拾五圓宛、原田源太郎、入佐トキの二君

一金參拾五圓宛、久木山百二、岩下一郎次、石原新眩、

川元親恵、野田親昌、川邊巳之助、關山繁、川原權
太郎、小濱秀助の九君
一金貳拾五錢宛、二見金畠、鬼塚兵一、高橋喜助の三君
一金貳拾錢宛、濱田直一、園田平治、永長新之丞、曾
木勇次郎の四君

一金拾五錢宛 松永強一、宮路直太郎、岡山秀助の三

君

一金拾錢、濱田與一郎君

小計金六拾九圓四拾錢

通計金參百參拾八圓八拾八錢也

◎寄贈書目

一、American Red Cross

湯田伸二君

一、隼人第二卷三號

全

一、鳴綠第一卷七號

永長新之丞君

城

◎同鄉會規則摘要

第一條、本會は加治木同鄉會と稱し加治木人及加治木に緣故ある者を以て之を組織す

第三條、本會の主旨を貫徹する爲め定期に總會を開き

又は雑誌を發刊して會員に配付するものとす

但雜誌の配付は當分の間會費として毎月金五錢を



明治四十二年十月十一日印刷

明治四十二年十月十五日發行

非賣品

編輯兼
發行者

本田

克

鹿兒島縣姶良郡加治木村反土九十四番戸

鹿兒島縣姶良郡加治木村反土四百九十三番戸
鹿兒島新聞社加治木支局内

發行所

加治木同鄉會事務所

印刷人

鹿兒島縣鹿兒島市



印刷所

醸出する者及第十六條に該當する會員に限る
第十四條、本會は雑誌『桝城』を四季に一回づゝ之を發行す

第十六條、本會に金五圓以上寄附したる者は特別會員とす

會告

一、次號發刊は來春元旦、原稿〆切は十二月一日

一、轉宿の方は其都度必ず御通知ありたし、然らざれば發送上困難なり

一、去る八月迄にて會費前金切れの人多し此際至急御納付を乞ふ

一、新年號は紙數を増加する筈に付多人數の投稿を歓迎す